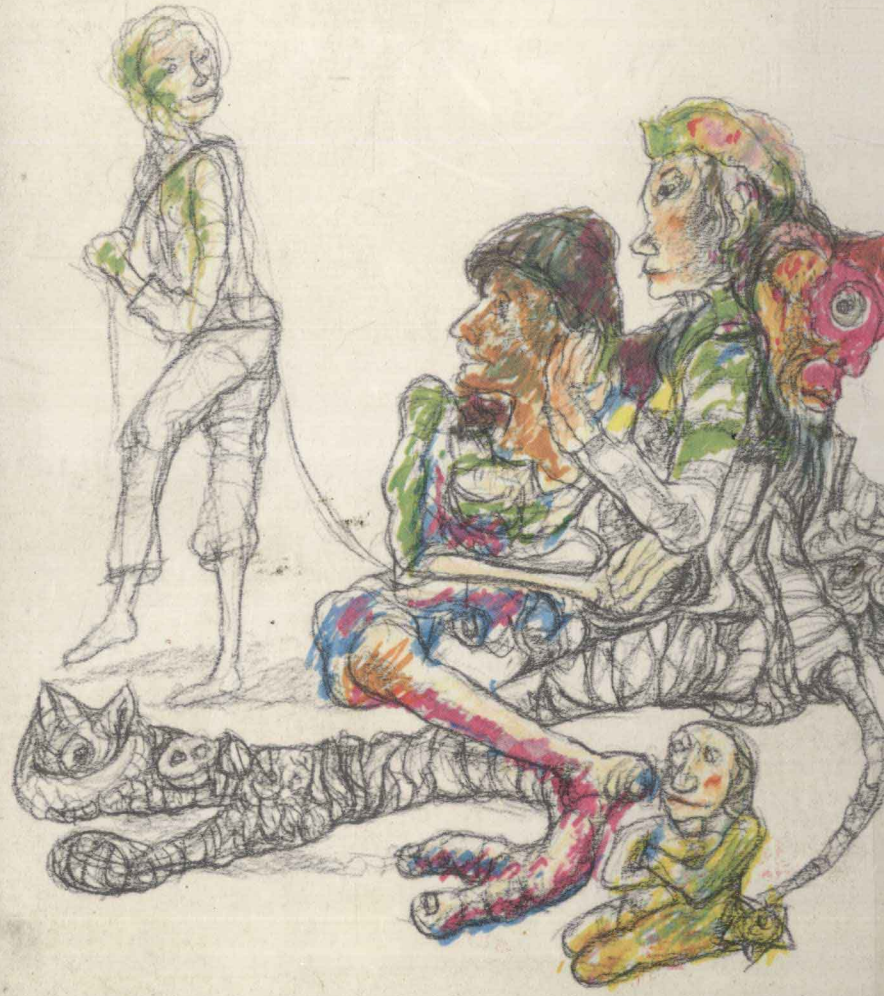
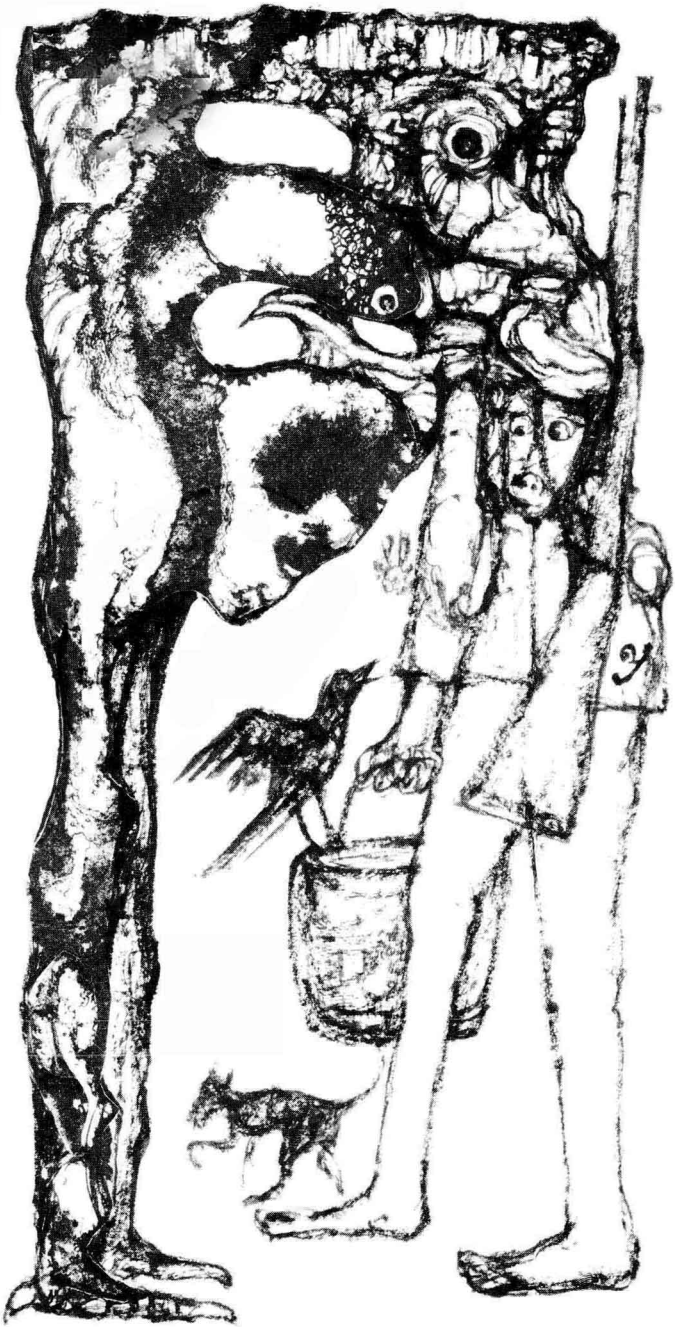
歩く影たち

開高健



く影たち

開高 健



新潮社

歩く影たち
一九七九年五月一五日発行
一九七九年七月一五日五刷
著者 開高健
発行者佐藤亮一
発行所株式会社新潮社
〒162 東京都新宿区矢来町七一
電話 業務部 (03) 二六六一五一一一
編集部 (03) 二六六一五四一一
振替東京四一八〇八
印刷金羊社 製本神田加藤
定価一二〇〇円

Copyright © 1979 TAKESHI KAIKO Printed in Japan
乱丁・落丁本は，御面倒ですが小社通信係宛御送付
ください。送料小社負担にてお取替えいたします

ヴェトナム短編集

歩く影たち

目次

兵士の報酬　7
フロリダに帰る　37
岸辺の祭り　73
飽満の種子　133
貝塚をつくる　165

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

玉、砕ける 197
怪物と爪楊枝 213
洗面器の唄 233
戦場の博物誌 251
後記 319

装幀
カット

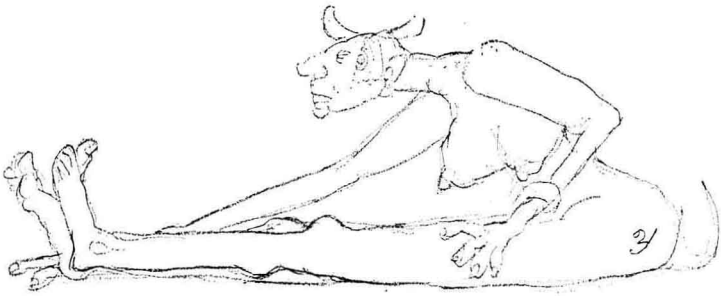
山下菊二

ヴェトナム短編集

歩く影たち

人の生は歩く影にすぎぬ

シェークスピア『マクベス』
第五幕　第五場



兵士の報酬

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

第一日

終った。

ピリオッドをうちこむと、吐息をついて椅子の背にもたれた。朝から働きつづけてきた肩が痛み、胃がむかむかした。私は吸いすぎ、飲みすぎた。部屋いっぱいにタバコの濃霧がたちこめ、ゆるやかにうごいている。散乱した原稿用紙を一枚一枚拾って番号順に整理した。ボーイを呼んで中央電報局へ持ってやらさねばならない。今日はクー・デターがないから電報局はすぐうってくれるだろう。クーがあると局が閉鎖される。尖兵たちは将軍の命令でまず放送局と電報局をおさえるのだ。解除されても外国通信社や記者たちが一度に殺到するので、いつ送稿してもらえるかわからない。けれど今日はクーもなく、派手な展開戦もなかった。私の原稿はすぐ送ってもらえるだろう。

濃霧を追うため、窓ぎわへいって鎧扉のハンドルをまわした。鎧扉は鉄製なので、ひどく重い。いつ街路から手榴弾を投げこまれるかわからないのでどの窓にも鎧扉がついている。この都のホテルでいちばん必要なのはルーム・クーラーよりも鎧扉であろう。窓外には私のもっとも愛する

時刻が開花していた。テーブルからコニャックのコップをとりあげると、窓ぎわにたち、脹れあがって毛虫のようになった舌で一滴ずつ舐めながら空を見た。黄昏の空がこの都の宝石である。毎日、奇跡が起るのだ。巨大で、異様で、華麗、すさまじい無言の劇がのしかかってきている。川の対岸の椰子と蘇鉄の原野に太陽がおち、紫いろに輝く血が空にみなぎっている。鋭く暗鬱な、浪費を惜しむことを知らない激情が蘇鉄の原野、小さな船工場、『キャプスタン』タバコの看板、灰褐色の泥岸、みじめなニッパ椰子の小屋、黄濁した速い川などを浸しているのだ。おろされたばかりの深紅のフランス・ビロードの緞帳や、感動をとげた瞬後の膣や、数トンの出孔圧のライフル銃弾を至近距離から浴びせられた傷口といったものをきまって私は想像させられる。昨日の黄昏、ジャングルのなかの葦の泥沼をこけつまろびつ敗走しているとき、サブ・マシンガンの銃弾にかすめられて泥水へ顔をつっこんだ瞬間にもおなじ夕焼を私は見た。それを文字に変えようとしていままでタイプライターをたたきつづけてきたのだったが、みじめな失敗であった。コニャックが舌にヤスリをかけるようなぐあいはタバコや疲労のせいだけではない。

ドアをたたく音がしたので炎上する窓からはなれた。

「……アントレ！」

テーブルにもどって原稿の頁番号をたしかめにかかり、ポケットから電報の着地払い証明カードと金をとりだした。ボーイにわたすチップのことを考えているうちに、まだベルをおしてなかったことに気がついた。いそいでドアのところへいって、ノブをまわすと、野戦服を着たアメリカ兵が、ほの暗い廊下にたっていた。小さくて、樽のようにまるまると太り、どこか熊を思わせる。ウェストモァランド曹長であった。

「ウェスト、君か！」

「おれだよ。おれだよ」
「入ってくれ。入ってくれ」
「よき兵士ウェストモアランド曹長がサイゴンへやってきたのさ。日本のアーニー・パイルに会いにな。調子はどうだね」
「あれからまだ寝てない。いまやっと記事を書きあげたところだよ。これからボーイを呼んで電報局へ持っていかせようと思ってたんだ」
ウェストモアランド曹長は私が砦に忘れてきた日本航空のバグをベッドにそっとおき、古い革張りの安楽椅子に腰をおろした。昨日の未明に部隊は砦を出発してジャングルに浸透したのだが、粉砕、敗走、夜の十一時に命からがら砦のちかくの戦略村にたどりついた。今朝ヘリコプターが村へやってきて私を運んでくれたのだが、砦の上空で降下しなかったから、バグはそのままおき去りにしたのだった。〝大作戦〟を待つために私はCゾーンのはずれの、ジャングルとゴム園にはさまれた砦で何日も暮した。いつ八一ミリ迫撃砲の夜襲があるかわからないので毎夜靴をつけたままベッドによこたわり、朝がくると塹壕からもどってきた曹長にどうだねと声をかけられて、まだ生きてるよと答えをかえす習慣になっていた。近くの国道を通過する輸送大隊防衛のためのハイウェイ・パトロールにいっしょに出たこともある。ほしかったらナイフからバズーカまで何でも貸してやるといわれたが私はいらないと答えた。武器を持ったら人を殺さなくちゃいけないから、といったのだ。武器を持たなくたってあんたは殺されるよと曹長は答えた。すさまじい密林の黄昏のなか、塹壕の上で、微風を額にうけながら短く話しあったことがあった。シヴィリアンが人を殺したら国際法に問われるかも知れないが、この国の場合は正当防衛ということになるだろう。これは重大な問題だ。よく考えておけ。あんたがほしいといったら何でも貸してやる。

操作も教えてあげる。曹長は優しく、寡黙にそういうと、弾薬の木箱を塹壕のなかへ投げこんで小屋へもどっていった。
「……ウェスト、まだ生きてる？」
「生きてるよ」
「作戦はどうなった？」
「今朝もう一回やりなおしということだったけれど、とりやめになったんだよ。次はいつか、まだわからない。だからおれは休暇をとることにしたんだ」
「休暇って何日もらえるんだい？」
「三日だよ、あんた。月に三日だよ」
「たった三日かい？」
「そうさ。ちきしょうめッ」
「フレンチ・コニャックを飲んでくれよ。今晩、あんたといっしょにすごしたい。どこかへ招待する。フランス料理、中国料理、ヴェトナム料理、どこでも招待する。何がいいかな。イタリア料理もあるし、まがいものだけれど日本料理店も一軒あるんだよ。なかなかいいニセモノなんだ。ポーク・カツがうまいんだ。どこでも希望をいってくれよ」
「どこでもいいさ。まかせるよ」
「はじめにいっとくけれど、今日はおれが払うからね。食事をしたら、それからあと、どこかへ飲みにいこうや」
「いいよ、アーニー。まかせる」
私はベルをおしてボーイを呼び、チップをやって、カードと原稿をわたした。曹長は安楽椅子

にもたれてコニャックをすすりながら、ひょいと私の原稿をのぞきこみ、日本人が英語で記事を書くとつぶやいた。奇妙な顔をしているので、私は笑いながらメモ用紙に、漢字、ひらがな、カタカナで『箸』と書いて説明した。日本人は一つの文章をこの三種の文字で書いたうえ、しばしば外国語から日本語になった単語をカタカナで混入するのだ。新聞社の外信記者たちは私のように英文タイプライターを使い、日本語の文章を発音のままラテン文字でうつ。東京ではそれを三種の文字の文章に分解し、組みたてる。

「めんどうなもんだな、ちきしょうめッ」

「習慣の問題だね」

「まるで暗号だな、あんた」

「そうだよ」

「日本人て、頭がいいんだな」

「むつかしいのは文字じゃないんだよ。何をいってるのかよくわからない文章ほど日本では尊敬されるんだよ。わかるところとわからないところをかきまぜる技術がむつかしいんだよ、ウェスト。ハッキリと語るのはまずいんだ。あいまいにしておくのがいいんだ。いつでもイエス、ノー、どちらでも答えられるようにしておくのが安全なんだよ」

「東洋人の心ってのはわからねえや」

「芸術なんだよ、ウェスト」

曹長はコニャックを飲みほし、一時間後にレ・ロイ街角の『ジェヴェール』で会おうといって部屋をでていった。私が指定したのだ。この店とチュ・ドー通りの『ブロダール』は新聞記者がよく集まるパリ風のキャフェ・レストランである。

窓を見ると、もう黄昏の絶頂の光輝はすぎていた。燦爛として暗鬱な血は空から消えて、川と波止場には薄青い、静謐な、水のような夜が漂っていた。部屋の床にもその水のようなものがしみだし、広がりつつあった。私は浴室に入って、電燈をつけ、ヒゲを剃った。陽焼けして、ひきしまった、眼の鋭い顔を鏡のなかに見た。アエロ・メントを頬と顎になすり、剃ったあと、ランヴァンのオー・ド・コローニュをすりこんだ。化粧タイルの床に汗と泥にまみれたオリーヴ・グリーンの野戦服がうずくまっていた。わき腹と背に大きなジャングル・ダニがしがみついていた。しっかりと食いついているので、ひっぱると腹の皮がついてきて、血がにじんだ。タバコの火で焼いた。Dゾーンをうろつく虎や象とまちがっているのだ。ジャングルのなかで枯葉に伏せて何時間も黄昏のしみるのを待っていたあいだにもぐりこんできたのにちがいない。

ヒゲを剃っても眼の鋭さは消えなかった。醜悪なまでに太った贅肉のだぶつきのなかで眼だけはつきつめるようにキラキラ輝いているので、かろうじて満足することとした。ほかに誇ってよいものは何もない。東京に送った従軍記事は、いまごろ、中央電報局のせっかちでまちがいだらけのキーでたたかれ、暗い夜空を走っているであろう。東京はそれを漢字とひらがなとカタカナに変えることに二時間腐心するであろう。しかし、まなざしのごとくすばやくうつろな、飽きっぽい日本人は、もう戦場報告に食傷していることだろうと思う。最前線に住みついて生死を賭けたのは私だけではないのだ。私は葦の沼地の泥水にとびこむ一瞬の眼に映った亜熱帯の黄昏の美しさ、戦闘直後に鳴きかわす名も知れぬ鳥類のざわめき、頭上をかすめる銃弾のしぶきの鉄兜のかげで見た賢いアリたちの営為などを語りたかったのだが、タイプライターをたたいているうちに思いがけぬ、つまらない、ほかのことばかり語ってしまった。ウェストが胸に至近弾を浴びてたおれているヴェトナム人の将校に肘で這いよって、サイゴンのPXでおれの名でフレンチ・コ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.